

高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第15報)

—参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討—

佐々木 全*・伊藤 篤司*・名古屋 恒彦**

(2011年12月5日受理)

Zen SASAKI・Atsushi ITOU・Tsunehiko NAGOYA

A Practical Study of "Eburi Class" for Children with High Functioning Pervasive Developmental Disorders (15)

— Through the Implementation of "tag rugby football" in the curriculum —

I 問題と目的

筆者らは高機能広汎性発達障害^{注)}のある小学生を対象としたエブリ教室を開催している(佐々木, 加藤, 2011¹⁾). この活動の目的は, 参加児に対する休日活動の提供であり, 上半期にはタグラグビー, 下半期には劇活動を活動内容としている(表1参照). 筆者らはこれらの実践を通じて参加児に対する支援の最適化を追究してきた(例えば, 佐々木, 加藤, 2010²⁾³⁾). 本稿は, その一環であり, タグラグビーにおける支援を実践的に検討するものである.

タグラグビーとは, ラグビーの簡易普及版であり, 「陣取りゴール型」の競技である. 2011年から実施される小学校の新学習指導要領でも取り上げられるほど注目されている. 鈴木(2009)⁴⁾は, タグラグビーの魅力として, 以下の4点を挙げている. すなわち, ①低学年の学習経験から発展させやすい. ②どの子ども, 今もっている力で楽しむやさしい学習を導きやすい運動, ③ゲームへの参加から豊富な運動量をもたらされる. 攻守問わず運動量と, 多様な動作が含まれる. ④個人差や男女差が顕在化しにくい運動, である.

上記の①について, 期せずして筆者らも同様に考え, エブリ教室で取組んできた鬼遊びからの発展, さらには, じゃんけん陣取りからの発展の接点として, タグラグビーを位置づけて導入した経緯がある(佐々木, 加藤, 2009⁵⁾). ②について, 「やさしい」ということは単に簡単であるという意味

表1 年間活動計画 (2011年度)

回数	日程	活動内容	備考
1	*		(震災の影響によって実施なし)
2	5月14日		リーグ戦開始
3	6月18日	タグラグビー	
4	7月16日		
5	8月20日		リーグ戦終了
6	9月23日		遠足
7	10月22日	タグラグビー交流戦	A c t . チームをリーグ戦
8	11月19日		
9	12月17日		
10	1月21日	劇活動	
11	2月18日		発表会
12	3月10日	保護者への報告会	保護者とスタッフによる

*いわて高機能広汎性発達障害のある人を支援する会(「エブリの会」)、**岩手大学教育学部

ではなく、むしろ首尾よく存分に楽しめる状況を整えやすいという意味であると筆者らは理解している。具体的には、接触プレーがないことの安心感、攻撃プレーではボールを抱えて走るという容易さ、守備プレーでは相手のタグを獲るといった目的の明確さがあり、エブリ教室の参加児童にとっても馴染みやすいと考えられた。③について、筆者らは、参加児とスタッフが共に活動することを信条としており、運動量の豊富さ、動作の多様さについては実感として確信している。④について、筆者らは、参加児に予めの苦手意識もなく取り組みやすいという印象を得た。

さて、筆者らは、2007年からエブリ教室における活動内容としてタグラグビーに取り組み始めた。一般的に馴染みの少ない競技ただけに、共に活動するスタッフにとっては競技自体の理解や課題分析が浅いことも事実だった。現在においても、スタッフ間において支援の内容や方法について、その共有、蓄積は不十分である状況は否めない。

そこで、本稿では、スタッフによる支援の内容や方法について、実践によって得られた知見を整理し明確化すること、それをスタッフ間で伝達、共有可能な情報として整理し、参加児の活動や心的過程の変遷の分析及び、タグラグビーの参加児への支援内容・方法の効果を検討することを目的とする。これをもって、タグラグビーにおける支援の最適化のための一助としたい。

II 方法

研究の方法は、エブリ教室における実践とそれに基づく考察である。具体的には、タグラグビーにおける参加児の活動の様子と、それに関与した支援方法を、参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目し、逸話的に抽出、分析する。

ここで用いる資料は、2010-2011年度のタグラグビーの実践記録である。これには、実践報告論文として公表しているものに加え、活動の計画及び実践に関する構想、スタッフの事前事後ミーティングの記録を記した第一筆者の実践記録ノート

や「エブリ通信」と称して第一筆者が発行している保護者宛の文書、記録写真をも含んだ。

なお、エブリ教室におけるタグラグビーの概要を以下に記した。

1 参加児の概要

参加児は盛岡市内およびその近隣地域在住であり、高機能広汎性発達障害の診断があるか、その疑いがあるとされた。また、専門の相談機関等からの紹介をうけた児だった。2011年度現在、6名の対象児（男女比＝3:3）とそのきょうだい（未就学児、高機能広汎性発達障害ではない小学生を含む）が6名参加している。

2 タグラグビーにおける活動の目的

エブリ教室の活動の目的は、参加児に対する休日活動の提供である。すなわち、参加児にとっての休日活動の充実をねがうものである。これに基づき、タグラグビーにおいては、「タグラグビーに熱中して取り組んでほしい」と表記している（佐々木、加藤、2011⁶⁾）。このねがいは、次の支援方針に即して、参加児一人一人について、その活動の様子に照らしながら具体化・個別化する。すなわち、①攻守それぞれのプレーにおいて目的的にプレーすること、②その過程では自分の力を存分に発揮して首尾よく、そしてチームとしての連携よくプレーすること、③プレーの成功と失敗に伴う葛藤をも含め、チームメイトと共に分かち合うこと、である。

3 タグラグビーにおける活動の形態

4チーム編成とし、各チーム3名の参加児と2名のスタッフで構成した。各チーム2名、計8名のスタッフが対応するが、一部に参加が流動的な状況があったため、何名かのスタッフは複数のチームを兼任することもあった。

活動は月一回第3土曜日、9:30~11:30までの2時間とし、近隣の体育館を借用して開催した。タイムテーブルを表2に示した。ウォーミングアップの後、チーム練習を経て、ゲームを行う。ゲ

ームの戦績は、4月から8月までの活動期間中累計され、それをもって優勝を争う。なお、10月には、同様にラグビーに取り組んでいる姉妹グループ「A c t. (アクト)」(A c t. マネージャー, 2011⁷⁾)との交流戦を行う。

ラグビーの主なルール大まかなルールは、次のとおりである。すなわち、①1チームを5名で編成する。プレーヤーは、タグベルトを装着し、腰の両側にあるマジックテープでタグを二本貼り付ける。②攻撃では、ボールを持ってゴールラインに走り込むこと（「トライ」と称するプレー）で得点となる。③パスは自分よりも後ろにいる味方に行く。④守備では、ボールを持っている相手のタグを獲ること（「タグ」と称するプレー）で相手の進行を止める。タグを獲られたプレーヤーは、立ち止まりタグをつけなおし、そこから味方にパスを出してプレーを再開する。⑤得点した場合やタグを5回連続で獲られた場合、ルーズボールを獲られた場合などには攻守交代する。

なお、ゲームの細部においては、会場の物理的な制限や、参加児の様子に合わせてラグビーの競技としての独自性を損なわない程度にルールの変更やアレンジを施した。参加児の様子に合わせたルールの変更には、不慣れさに応じた軽減的、配慮的な変更もあればプレーの成熟に応じた発展的な変更も含んだ。

Ⅲ 結果

エブリ教室における支援の構造は、「ラグビーに熱中して取組んでほしい」とのねがいを参加児一人一人について、その活動の様子に照らしながら具体化・個別化し、その実現に資する支援方法を講ずる。それに基づき、ねがいの実現状況を評価する。

支援方法は、次の3つの支援方針に即す。すなわち、①攻守それぞれのプレーにおいて目的的にプレーすること、②その過程では自分の力を存分に発揮して首尾よく、そしてチームとしての連携よくプレーすること、③プレーの成功と失敗に伴う葛藤をも含め、プレーの成果をチームメイトと共に分かち合うこと、である。

これらの構造に即して、以下では活動の様子を逸話的に記述する。

1 彩華さん（仮名、3年生、女兒）

(1) 活動の様子と支援方法

彩華さんは、パスを受けるとすぐに駆け出す俊敏なプレーヤーである。小柄であることから、相手の守備選手からはタグをとりやすく、チームの得点源として活躍を期待されていた。ところが、彩華さん自身は、いつも険しい表情をしており、ラグビーを楽しめていない様子が散見された。保護者からは、「もともと運動自体が苦手で、タ

表2 エブリ教室のタイムテーブル（2011年度の例）

時刻	内容
8:45	スタッフ集合、会場設営、事前ミーティング
9:30	参加児集合、身支度、スケジュールの確認
9:40	導入(例;ラグビーであれば準備体操、ウォーミングアップ、チームごとの作戦会議)
10:00	展開(例;ラグビーであれば、試合)
11:15	終結(例;ラグビーであれば、クールダウン、成績発表、感想交流、清掃)
11:30	参加児解散、スタッフ会場撤去
11:50	スタッフ事後ミーティング
12:45	スタッフ解散

ラグビーも苦手意識を持っているようだ。判断や行動にスピードを求められると混乱するようだ。ただ、その場での活動には一生懸命取組もうとするので、我慢して取り組んでいる。」との話が聴かれた。

プレーの様子を照らし合わせてみると、ラグビーで用いる動作において、ボールを持って走る、タグをとるなどの基本動作はスムーズだったが、攻撃場面では、パスを受けた後にめざすべきゴールの方向を間違えること、間違ったことで気を落とす様子があった。また、パスを要求されると動作が停止してしまう様子があった。守備場面では、いつもスタッフの声がけに応じて走り出すものの、そのタイミングが遅れがちであり、それに重ねてスタッフからの声がけがなされるために、表情を険しくし、判断や動作が停止してしまう様子がかがわれた。スタッフは、彩華さんは自分のプレーに目的意識を持ちにくく、その都度、闇雲にプレーせざるを得ない状況にあると理解した。

そこで、彩華さんには、攻守共にポジションや役割を明確にし、目的的なプレーをしやすいようにすることにした。このとき、彩華さんの持ち前の俊敏さと運動量が強みとして次のような支援を講じた。

①攻撃では、めざすべきゴールの方向を、ゲーム開始時に確認する。確認の方法は、ゴールエリアを示すカラーコーンの色を目印にすること、ゴールエリアに自チームのメンバー表を彩華さん自身に設置してもらうことであった。また、ゲームが中断し、セットプレーで攻撃を再開するというような場面で、彩華さんに対してスタッフが適宜「パスを受けたら、(ゴールエリアを示している)赤いコーンめざして走ろう」などと確認をした。

②攻撃では、ゴールから中・近距離でパスを受けてライン際を駆け抜けてトライをねらうという戦略を提案し確認し合った。すなわち、パスを出す側ではなく、パスを受ける側としてのポジションである。走るコースをライン際として定めたのは、瞬時の状況判断を軽減し、走るコースを迷わなくて済むためである。また、ライン際を狙うと

いうのはチームとしての攻撃の戦略としても有効なものでもあった。

③守備では、彩華さんと他のチームメイトがペアとなり、二人で相手のボールキャリア(ボールを持って攻め入るプレーヤー)に向かっていくという「前衛」のポジションにした。相手が動き出し次第、コート中央から追いかけることをはじめめる。スタッフは、相手の動き出しに合わせて「ゴー！」と駆け出しの合図を送った。

(2) 評価

支援方法として記した①、②によって、攻撃における目的が明確になった。彩華さんは、左サイドでパスを受けて躊躇なくライン際を駆け抜けてトライを決めた。このことを繰り返すうちに、ゴールを間違えることへの不安はなくなり、トライを決めた後には、笑顔が見られるようになった。

支援方法として記した③によって、守備における目的が明確になった。彩華さんは、スタッフの合図に応じてボールキャリアを追走したが、これは、相手の攻撃に対する最初の対応をするという役割だった。そのことが、彩華さんにとっての目的を一層明確にしたと考えられた。それは、一般的に守備におけるこの後の対応は、パスの展開等が加わり刻々と変わる状況に応じて判断、行動を変えていくという複雑なものになる。この状況にあっては、スタッフの声がけは矢継ぎ早になり、彩華さんにとっては、受身的で混乱状況を強いてしまう。しかし、彩華さんの「前衛」のポジションでは、ボールキャリアに一点集中すればよい。このことで彩華さんは、持ち前の俊敏さと運動量を遺憾なく発揮し始めた。例え、この守備で相手のタグが取れなくとも、「後衛」のポジションのチームメイトがフォローするという守備戦略を用いたため、相手を追い掛け回し、その進路を限定させることで十分に守備の役割を果たすことになった(図1参照)。

これら、彩華さんの目的的なプレーの確立は、必然的にチームとしての目的の範囲内に位置づけられる。よって、そこで得られるプレーの成功と失敗についてチーム内で共感しあい、ハイタッチ

をしたり笑顔をかわしたり，励ましあったりすることが本音でなされるようになった。彩華さんは帰宅後「ラグビー楽しい」と保護者に語り，次回の活動を楽しみにし始めたという。

2 耕治君（仮名，5年生，男児）

（1）活動の様子と支援方法

耕治君は，運動量豊富で技術も高いプレーヤーである。ボールを持たば，そのスピードと俊敏な身のこなしで相手守備を掻い潜り一人でもトライを決める。守備では，ボールキャリアに素早く詰め寄りタグをとる。パスの出所を見切って追いかける標的を切り替えてタグをとる。チームのエースと言える存在感を即座に得た。

しかし，他のチームメイトがボールに触らなくともチームが勝ってしまうといっても過言ではないという状況は，支援方針③として挙げた「プレーの成功と失敗に伴う葛藤をも含め，プレーの成果をチームメイトと共に分かち合うこと」との矛盾する。しかし，耕治君のプレーを手控えることを求めては，支援方針②の前段部分にある「自分の力を存分に発揮して」と矛盾する。

そこで，支援方針②の後段部分「チームとして

の連携よくプレーすること」と，支援方針①「攻守それぞれのプレーにおいて目的的にプレーすること」を念頭において，次の支援方法を講じた。

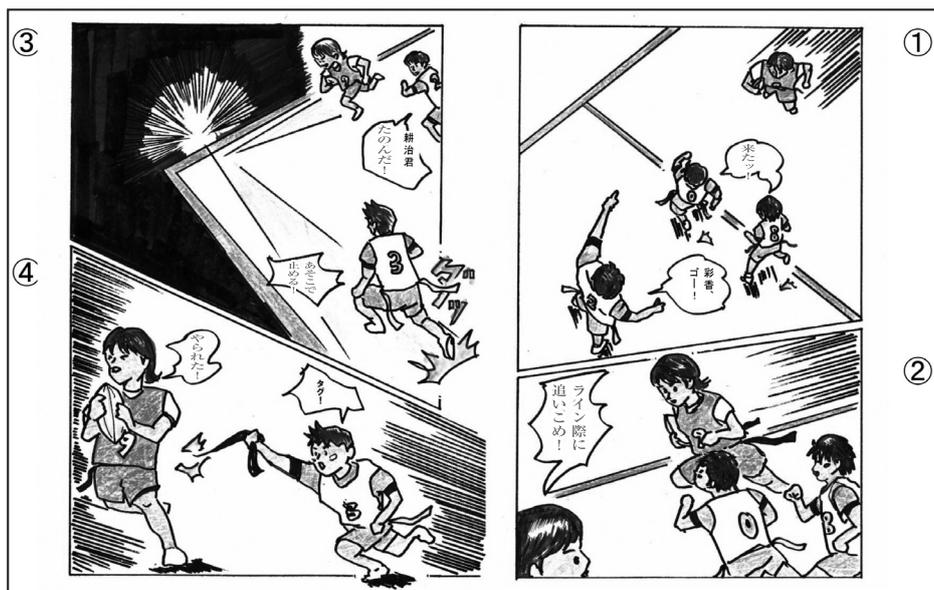
①攻撃では，チームとして左サイドを重点的に攻撃し，耕治君は右サイドで待ち構える。相手守備陣が左サイドに引き寄せられたところで，手薄になった右サイドへのロングパスをし，それを受けた耕治君がトライをねらうという戦略を提案し確認しあった。

②守備では，上記した彩華さんのような「前衛」ポジションのプレーヤーが相手の動きを限定したところで，タイミングを見計らって飛び出し，相手のタグを取るという「後衛」のポジションを提案し，「前衛」，「後衛」という守備の役割分担を戦略として確認しあった。

（2）評価

支援方法として記した①によって，耕治君には的確なキャッチングの技術，その後の走路選択などの的確な判断が求められた。耕治君はそれらを遺憾なく発揮し，チームとしてもこの連携プレーが痛快なほど決まり連勝した。左サイドで相手を引き寄せた他のチームメイトも，逆サイドでの耕治君のトライを喜んだ。また，左サイドのチーム

図1 守備における「前衛」と「後衛」の役割分担と動き



メイトが、耕治君へのロングパスをフェイントにして、左サイドの混戦を突っ切ってトライを決める戦略も成功した。この直後、スタッフが耕治君に、自分がボールを持たずにもチームの攻撃に寄与したことを伝えると力強く頷きで応えた。

支援方法として記した②によって、耕治君は、「後衛」の守備位置であるゴールエリア前に着いて、「前衛」のチームメイトが追い詰めるボールキャリアの動きを見極め、相手のタグをゴール直前で獲り、相手のトライを阻んだ。時にはコートを横断するパスに合わせて素早く逆サイドに駆けもどるなどの緊迫した対応もあった。耕治君には、広い視野を持つての状況判断と、相手との距離を自身の走力との兼ね合いで随時検討し最適化を図る判断などを求められた。耕治君はそれらを遺憾なく発揮した(図1参照)。

これら、耕治君のプレーをチームワークとして明確に位置づけたことで、耕治君の持てる力の発揮とプレーの成果の共有が両立した。

3 広海君(仮名, 1年生, 男児)

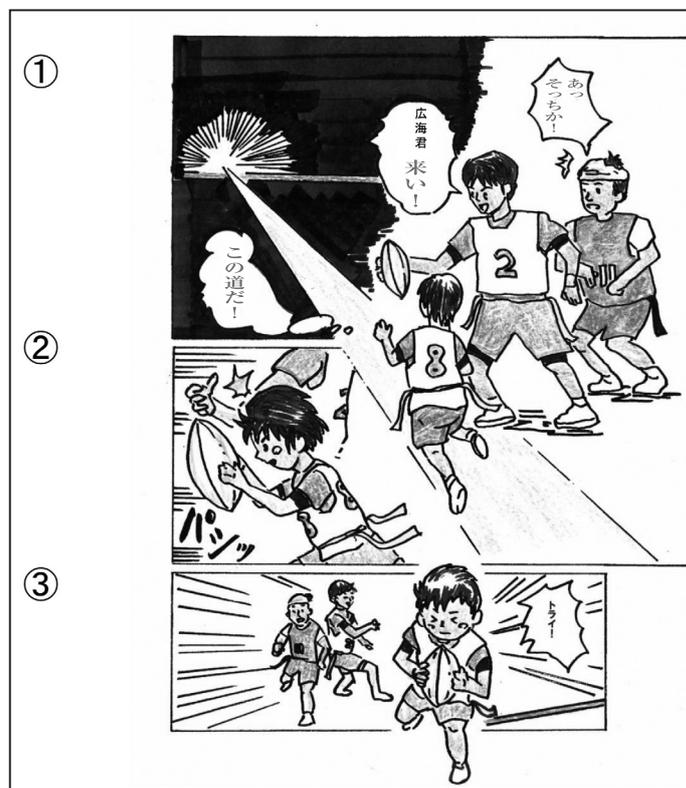
(1) 活動の様子と支援方法

広海君は、ボールを持つと小柄な体を駆使して、狭いスペースでも切り抜けてトライをねらう意欲旺盛なプレーヤーである。ただ、年齢的にもボールの扱いに不慣れな様子があり、中長距離からのパスを受けることが苦手だった。もともとポーカーフェイスで過度に怖がる様子はないものの、中長距離からのパスに対しては身を引き、顔をそむける様子があった。これでは支援方法の②にある「自分の力を存分に発揮」しにくいと思われた。そこで、次のような支援を講じた。

①チームメイトから投げられたパスを受けるのではなく、自らが走り込んでチームメイトの手にあるボールを手渡しで受けることを含んだ戦略を提案し確認しあった。

②中長距離のパスを受ける際には、スタッフがキャッチを代行し、広海君にボールを手渡すという戦略を提案した。

図2 走り込むコースを想定しての、手渡しによるパス



(2) 評価

支援方法として記した①、②によって、広海君は、安心してプレーをし、ボールを持った後のプレーに一層専念しやすいようだった。①では、ボールを手渡し役をしたスタッフの体によって、広海君の動きが相手守備から死角となり、戦略としても有効だった。また、手渡しをすべくかざしたボールの位置によって、広海君が走るコースを判断する様子があったため、スタッフは意図して、ボールの位置をもって広海君の走り込むコースを誘導し、相手の守備の隙を突けるようにした（図2参照）。

②では、そもそもチームが逆サイドを集中的に攻撃している場面で、広海君がスタッフと逆サイドで待ち構えるということを前提とした。広海君は、ボールを受けてから駆け出すまでのタイムラグが徐々に減り、相手守備が駆けつける前にトライを決めることができた（図3参照）。

これら、広海君の技能を補完する意図での支援は、むしろチームとしての戦略のレパートリーと

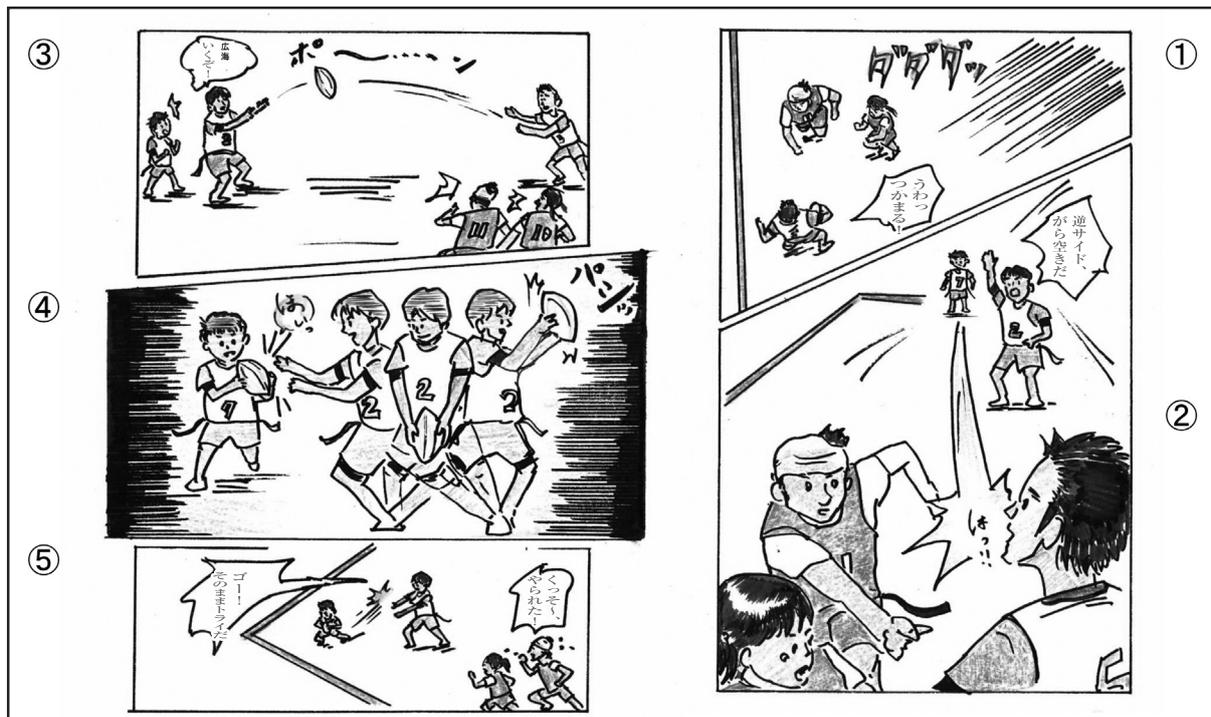
なったといえる。②において、パスを受け取ったスタッフが、中長距離のパスを受けたときに、リターンパス（折り返しのパス）をフェイントにしてから広海君に手渡すなどのアレンジも取り入れ、相手守備を困惑させるといった場面もあり、戦略としての精度を高めた。チームに勝利をもたらす会心のトライを決めた広海君は、その瞬間には、ポーカフェイスを崩して「やった！」とコンビのスタッフを振り返った。

4 一輝君（仮名、4年生、男児）

(1) 活動の様子と支援方法

一輝君は、運動に不器用な様子があるものの、ルールをよく理解し、勝負への熱意が強いプレーヤーである。ゲーム中には、方向転換する際に足がもつれて転倒したりしても、めげずに何度も立ち上がり、執拗にボールキャリアを追いかけて回した。ゲームの勝敗やプレーの成否に一喜一憂し時にはチームメイトを厳しい口調で鼓舞する様子もあった。特にその様子は守備において見られた。こ

図3 キャッチの代行と手渡しによるパス



の状況にあって、一輝君はあらゆるプレーに関与しようというあまり、体力も消耗し、心理的にも追い詰められてしまうのではないかと察せられた。そこで、支援方針として挙げた3点に即した支援方法として、常時「相手のエース」にマンツーマンで対応するという戦略を提案し、確認しあった。

(2) 評価

一輝君にとっては、「相手エース」を抑えることがチームの勝利になるというロジックを理解し、使命感を強く抱いた。これまで闇雲にタグを追い回すのとは異なり、チームの勝利に向けての具体的で明確な目的意識をもった。また、一輝君が守備で見せる持ち前の執拗さは、標的に対する注意集中といえた。これは「相手エース」への対応として注意集中の範囲を特定することで、より強く発揮しやすくなった。自分とチームメイトの役割分担が明確になったことで、チームとしての失点場面における責任の所在が明確になり、自身のミス我自認した。そこでチームメイトのスタッフに励まされながらプレーを続けた。他のチームメイトへの厳しい口調がなくなり、むしろ、失敗を話題にするのではなく、「次こそ!」とか「攻

撃で取り返すぞ!」というスタッフの声かけに応じて、攻撃場面への意欲へ切り替えるようになった。

これら、一輝君の目的的なプレーの確立は、必然的にチームとしての目的の範囲内に位置づけられる。また、チームメイトとの情緒的な軋轢を生じさせるようなリスクを回避し、熱意溢れるプレースタイルとして共感的に受け入れられた。

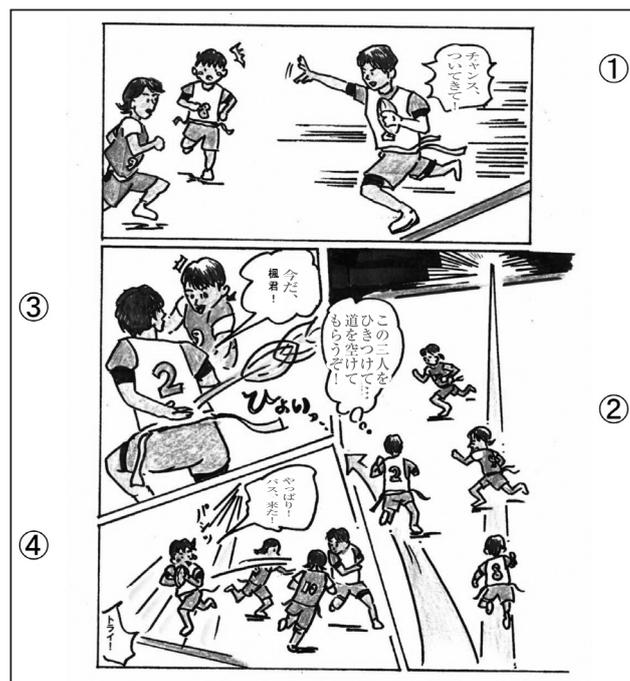
5 楓君(仮名, 5年生, 男児)

(1) 活動の様子と支援方法

楓君は、ボールの扱いに不慣な様子があるものの、意欲旺盛で、プレーの成否に対して静かに一喜一憂する様子があった。セットプレーにおいてパスを受けると躊躇し駆け出しにくいのが、自陣でボールキャリアとなったときには、中長距離を走り、その勢いそのままにトライを目指す。しかし、途中でタグをとられると、悔しさのあまり、立ち止まらずにゴールまで走りボールを抱えたまま寝転んだりする様子があった。その後スタッフに励まされてプレーに復帰することが多かった。

そこで、支援方針としてあげた3点に即した支

図4 相手守備をひきつけて、走りながらのパス



援方法として、楓君には、ゴール直前で走りながらボールを受けトライを狙う戦略を提案し確認しあった。この際、ボールキャリアとなったスタッフが楓君に追走するよう促し、相手の守備をひきつけた上で楓君にパスを出すことを打ち合わせた。

（2）評価

上記の支援方法によって、楓君のプレーの内容と目的を明確にした。ゴール前に走り込んだ楓君は、スタッフが出したパスを鼻で受けてしまい、危うくボールを取りこぼしそうになったが、両手と顔でボールを押さえるようにしてトライを決めた（図4参照）。鼻の痛みよりもチームメイトに祝福されて笑顔で応えながら守備についた。

スタッフが守備をひきつけてから楓君にパスをするために、楓君はトライをしやすいようだったが、状況によっては何度かタグをとられることもあった。しかし、そこで以前のように、プレーを中断し、復帰に時間を要することはなくなり、プレーの再開がスムーズになった。また、持ち前の意欲旺盛なプレースタイルが常時発揮され、チームを盛り立てた。

Ⅳ 考察

ラグビーにおける支援方法として、その一部を逸話記録によって明らかにした。そもそも「ラグビーに熱中して取組んでほしい」とねがい、その実現のために、次の支援方針を掲げた。すなわち、①攻守それぞれのプレーにおいて目的的にプレーすること、②その過程では自分の力を存分に発揮して首尾よく、そしてチームとしての連携よくプレーすること、③プレーの成功と失敗に伴う葛藤をも含め、プレーの成果をチームメイトと共に分かち合うこと、である。

これに基づいて講じた支援の方法は、ラグビーにおける戦略に含まれた。このことから考えると参加児一人一人にとっての個別化・具体化された個別の支援は、活動内容としてのラグビーの一般的な戦略の検討に包括されるものであった。本稿は、ラグビーの戦略の研究ではなく、

参加児の支援方法の研究であるのだが、ラグビーに熱中すること自体を活動の目的として位置づけたときにはその支援方法は、あくまでもラグビーとしての自然さと必然さを伴う「ナチュラルサポート」としての性質を強めるのではないかと思えた。

本稿がエブリ教室のスタッフ間で伝達、共有可能な情報として活用されることをねがう。なお、今後の課題として、次の3点を挙げる。すなわち、①ラグビーにおける支援方法の検証、②新たな知見の蓄積、③スタッフ間で伝達、共有可能な情報として活用されやすい形式の検討、である。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、ご理解、ご協力いただいた方々へ感謝申し上げます。第一に、エブリ教室の児童とその保護者の皆様。そして、ご一緒いただいたスタッフ諸氏。

注釈

高機能広汎性発達障害とは、「知的障害を伴わない広汎性発達障害」という意味である。すなわち、知的障害を伴わない自閉症（いわゆる高機能自閉症）、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害包括する概念である。

文献

- 1) 佐々木全, 加藤義男 (2011) 高機能広汎性発達障害児・者への支援の取り組み (2) - 「エブリの会」, 1998年から2010年までの経緯 - 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 10, 203-210.
- 2) 佐々木全, 加藤義男 (2010) 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第11報) - 単元「ラグビー」における実践的検討 -, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 9, 175-190.
- 3) 佐々木全, 加藤義男 (2010) 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第12報) - 単元「劇活動」にお

- る実践的検討－，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，9，191-206.
- 4) 鈴木秀人 (2009)；公式BOOK だれでもできるタグラグビー，小学館.
- 5) 佐々木全，加藤義男 (2009) 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第10報)－参加児童の自立的・主体的な活動を支える，IEPのあり方の検討 (2)－，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，8，245-262.
- 6) 佐々木全，加藤義男 (2011) 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第13報)－ねがいの実現状況と，支援方法の関係性に着目して－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，10，211-220.
- 7) A c t. マネージャー (2011)，花風レポート A c t. ～クローバー×エブリ，放課後活動の試み，はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会 年報花童・風童，7，31.